	マツモト　カヅ
氏　　名	**松本　佳津**
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博第1304号
学位授与の日付	2023年9月6日
学位授与の条件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学位論文題目	高齢世代の居場所のモノからみる長寿社会のインテリアの活用の可能性 (The Potential Application of Interior Design in the Aging Society Assessed from the Things Belonging to the Spaces for the Elderly)
論文審査委員	主 査　教授　北川　啓介 准教授　夏目　欣昇 准教授　伊藤　洋介 教授　村上　心 （椙山女学園大学）

論文内容の要旨

高齢者世代の住まいの現状を通して，長寿社会における人にふさわしい住まいのあり方の根拠を示すため，住まいの内部を構成するインテリア，中でもモノに注目し分析のまとめを論じるものである。目的は，高齢者世代の心豊かな住環境の実現である。自身の研究を予防工学と捉え，現況から工学的な視点を持って分析し新たな知見を見出すことである。

寿命の延伸に伴い過去になく長寿命となり今後も延伸する。その高齢化のスピードも世界一であるため施策が追いついていない。戦後 75 年以上経過し社会構造が劇的な変貌を遂げる中，住まいのあり方も大きく変容しているが，住まいの性格上，建築当時のままであり高齢者にはそぐわない面が多々現れている。日本の一般的な木造住宅の寿命ものびている。国の長期優良住宅の推奨などの政策もあり，今あるものを生かすリノベーション市場も６兆円規模と大きいことからも人に合わせた住宅への変化が急がれている。かつての日本人の人生ロードモデルは，家族介護を前提とし，終の住処は施設であったが，現在は自宅でできるだけ最期までを望む声が大多数であり国の方向性も変わってきている。

しかし，その高齢化における日本人に則した理想的な住まいのあり様はまだ明確とは言えず，当事者は具体的にどのようにしたらよいかを知りたがっている。また，施工の現場では具体的なノウハウを望む声も多く手探りながら対応しているのが現状である。メーカー，施工業者それぞれがさまざまな切り口で訴求をするが，多様な当事者たちにとっては自分自身に置き換えができにくいことや，寿命を可視化できないこと，対応の遅さによる諦めなど問題も多い。したがって，根拠のある具体的な事例指標が急がれており早期に提供していくことが重要である。

さまざまな情報が飛び交う中，多くは経済的視点，技術的な視点に留まっている。高齢者の住まいのあり方の具体的な指標があることは，自身の人生を最期まで安心して全うできるこ

とにもつながる。環境の最小単位である自身の住まいが，安心安全で自分らしくいられる場であることにつながれば人生そのものの自分らしさにつながることとなる。Well-beingやSDGsといった言葉にも，住まいに根付くことが多い。研究の分野では住宅の内部であるインテリアから長寿高齢社会を論じたものは少ない。

つまり，これは社会問題の要望を踏まえた問題解決につながる意義の高い取組みである。本論文はその中でも，住宅内部の高齢者の居場所には高齢者の本質が現れることに着眼した。その現況である本質を分析することで見出された新たな知見は，具体的であり高齢者世代の心豊かな住環境の実現に寄与し社会的な意義へと大きくつながっていくものである。

本論は「高齢世代の居場所のモノからみる長寿社会のインテリアの活用の可能性」(The Potential Application of Interior Design in the Aging Society Assessed from the Things Belonging to the Spaces for the Elderly) と題し，以下の６章と付録により構成される。

序論（第１章），インテリアの活用に向けての研究の論理と進め方（第２章），長寿高齢社会にふさわしいインテリアの活用に向けての現況調査（第３章），居場所のモノから高齢者のためのインテリア活用の可能性（第４章），居場所の床に置かれたモノから高齢者のためのインテリア活用（第５章），分析の考察と結論（第６章）そして，インテリアの効果100歳住宅®の具体案（付録），を試案として掲載する。住まいの在り方の本質～すなわち人の本能とも言える行動を踏まえながら紐解いていき具体的事例とする。

以下に各章の概要を示す。

第１章では，研究の背景，目的，意義を示した。また，これまでの取り組みや至る経緯，関連する既往研究を整理した。

第２章では，インテリアの活用に向けての研究の論理として，分析対象，方法についての考え方を示し，分析対象資料の位置付けを整理した。次に研究の流れを示し，本論における，用語の定義，分析の手順，研究の構成を整理した。2017年度に行ったアンケートから現状の把握の必要性の結果を受け次章への調査へとつながる。

第３章では，高齢者が１日の中で一番長く居る居室の調査について，調査の概要，目的，調査対象の設定，定義，調査方法を整理し，許可をいただくことができた50名それぞれの住まいの概要や，調査における写真資料の作成，モノの定義，架設関係について，を論じ，モノとモノの架設関係における要素について整理分類を示した。また，50名の居室におけるモノの床専有率についても整理した結果，壁際に並べて配置されることにより床壁の境目の認識が曖昧になっていることが見てとれた。

第４章では，調査で拾い出した居室にあるモノすべてについての，概要及び，研究方法，調査結果からそれぞれの架設関係から導き出した高齢者の居室における特徴をまとめた。その結果，自分仕様への工夫の道筋，抗加齢対策，技術の未活用，といった３つの特徴を見出し，住宅におけるインテリアに対する西欧と日本の違いも参考にしながら論じた。

第５章では，さらに詳しい特徴を導き出すために架設関係の中でも突出して多い積載の床におかれているモノに注目し，ここではさらにモノの高さと置かれ方を加味しての分析を行い，そこから導きだされた特徴を３つの効果，安心，安全，健康としてまとめ，論じた。

第６章では，第４章，第５章を総括しモノを要素として仕分けした際の特徴を，支持要素，接置要素，高さから見た要素，置かれ方から見た要素，とし，見出されたそれぞれの特徴を整理し高齢者にとって以下の９つの効果に整理して論じた。架設関係と積載より，営み働きの構築，自分らしい環境作り，多様な体位快適さ保持の工夫，架設関係と取付より，視界視線の活用，居心地の追求，技術の活用（未活用），床の室内要素の効果より，安全を高める効果，安心を高める効果，健康を高める効果，である。最後に今後の課題と展望を論じた。

論文審査結果の要旨

本論文は，高齢者世代の住まいの現状を通して，長寿社会における人にふさわしい住まいのあり方の根拠を示すため，住まいの内部を構成するインテリア，中でもモノに注目し分析のまとめを論じたものである。目的は，高齢者世代の心豊かな住環境の実現である。自身の研究を予防工学と捉え，現況から工学的な視点を持って分析し新たな知見を見出すことである。

寿命の延伸に伴い過去になく長寿命となり今後も延伸する。その高齢化のスピードも世界一であるため施策が追いついていない。戦後75年以上経過し社会構造が劇的な変貌を遂げる中，住まいのあり方も大きく変容しているが，住まいの性格上，建築当時のままであり高齢者にはそぐわない面が多々現れている。日本の一般的な木造住宅の寿命ものびている。国の長期優良住宅の推奨などの政策もあり，今あるものを生かすリノベー ション市場も6兆円規模と大きいことからも人に合わせた住宅への変化が急がれている。かつての日本人の人生ロードモデルは，家族介護を前提とし、終の住処は施設であったが，現在は自宅でできるだけ最期までを、望む声が大多数であり国の方向性も変わってきている。

しかし，その高齢化における日本人に則した理想的な住まいのあり様はまだ明確とは言えず，当事者は具体的にどのようにしたらよいかを知りたがっている。また，施工の現場では具体的なノウハウを望む声も多く手探りながら対応しているのが現状である。メーカー，施工業者それぞれがさまざまな切り口で訴求をするが，多様な当事者たちにとっては自分自身に置き換えができにくいことや，寿命を可視化できないこと，対応の遅さによる諦めなど問題も多い。したがって，根拠のある具体的な事例指標が急がれており早期に提供していくことが重要である。

さまざまな情報が飛び交う中，多くは経済的視点，技術的な視点に留まっている。高齢者の住まいのあり方の具体的な指標があることは，自身の人生を最期まで安心して全うできることにもつながる。環境の最小単位である自身の住まいが，安心安全で自分らしくいられる場であることにつながれば人生そのものの自分らしさにつながることとなる。Well-beingやSDGsといった言葉にも，住まいに根付くことが多い。研究の分野では 住宅の内部であるインテリアから長寿高齢社会を論じたものは少ない。

つまり，これは社会問題の要望を踏まえた問題解決につながる意義の高い取組みである。本論文はその中でも，住宅内部の高齢者の居場所には高齢者の本質が現れることに着眼した。その現況である本質を分析することで見出された新たな知見は，具体的であり高齢者世代の心豊かな住環境の実現に寄与し社会的な意義へと大きくつながっていくものである。

本論は 「高齢世代の居場所のモノからみる長寿社会のインテリアの活用の可能性」「The Potential Application of Interior Design in the Aging Society Assessed from the Things Belonging to the Spaces for the Elderly」 と題し，以下の 8章と付録により構成される。

序論（第1章），インテリアの活用に向けての研究の論理と進め方（第2章），長寿高齢社会にふさわしいインテリアの活用に向けての現況調査（第3章），居場所のモノから高齢者のためのインテリア活用の可能性（第4章），居場所の床に置かれたモノから高齢者のためのインテリア活用（第5章），

分析の考察と結論(第6章)そして，インテリ アの効果100歳住宅®の具体案(付録)，を試案として掲載する。住まいの在り方の本質，すなわち人の本能とも言える行動を踏まえながら紐解いていき具体的事例とした。

以下に各章の概要を示す。

第1章では，研究の背景，目的，意義を示した。また，これまでの取り組みや至る経緯，関連する既往研究を整理した。第2章では，インテリアの活用に向けての研究の論理として，分析対象，方法についての考え方を示し，分析対象資料の位置付けを整理した。次に研究の流れを示し，本論における，用語の定義，分析の手順，研究の構成を整理した。2017年度に行ったアンケートから現状の把握の必要性の結果を受け次章への調査へとつながる。第3章では，高齢者が1日の中で一番長く居る居室の調査について，調査の概要，目的，調査対象の設定，定義，調査方法を整理し，許可をいただくことができた50名それぞれの住まいの概要や，調査における写真資料の作成，モノの定義，架設関係についてを論じ，モノとモノの架設関係における要素について整理分類を示した。また，50名の居室におけるモノの床専有率についても整理した結果，壁際に並べて配置されることにより床壁の境目の認識が曖昧になっていることが見てとれた。第4章では，調査で拾い出した居室にあるモノすべてについての，概要及び，研究方法，調査結果からそれぞれの架設関係から導き出した高齢者の居室における特徴をまとめた。その結果，自分仕様への工夫の道筋，抗加齢対策，技術の未活用，といった3つの特徴を見出し，住宅におけるインテリアに対する西欧と日本の違いも参考にしながら論じた。第5章では，さらに詳しい特徴を導き出すために架設関係の中でも突出して多い積載の床におかれているモノに注目し，ここではさらにモノの高さと置かれ方を加味しての分析を行い，そこから導きだされた特徴を3つの効果，安心，安全，健康，としてまとめ論じた。第6章では，第4章，第5章をまとめ，モノを要素として仕分けした際の特徴を，支持要素，接置要素，高さから見た要素，置かれ方から見た要素，とし，見出されたそれぞれの特徴を整理し高齢者にとって以下の9つの効果に整理して論じた。架設関係・積載より・営み働きの構築，・自分らしい環境作り，・多様な体位快適さ保持の工夫，架設関係取付より，・視界視線の活用，・居心地の追求，・技術の活用（未活用），床の室内要素の効果より・安全を高める効果，・安心を高める効果，・健康を高める効果，である。さらに今後の課題と展望を論じた。付録として，インテリアの活用の可能性から導き出した指標作成に向け，導出した結果をもとにインテリアの効果100歳住宅®の具体案を試案として掲載している。それらを易経とのすり合わせによってより明確に訴求することを試みた。

本論文は，インテリアを切り口に，長寿社会に活かすべき居場所のデザインを論理的に提示するものであり，それらの成果は，日本インテリア学会論文集での査読付論文2編，また，国際会議報告集での報文1編として掲載されており，博士の学位授与に相応しい内容であると判断する。